

千葉市川戸・柳沢遺跡
ーグループホーム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書ー

2016

株式会社カラカマ工務店
公益財団法人千葉市教育振興財団

千葉市川戸・柳沢遺跡

ーグループホーム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書ー

2016

株式会社 カラカマ工務店
公益財団法人 千葉市教育振興財団

千葉県川戸・柳沢遺跡

ーグループホーム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書ー

2016

株式会社 カラカマ工務店

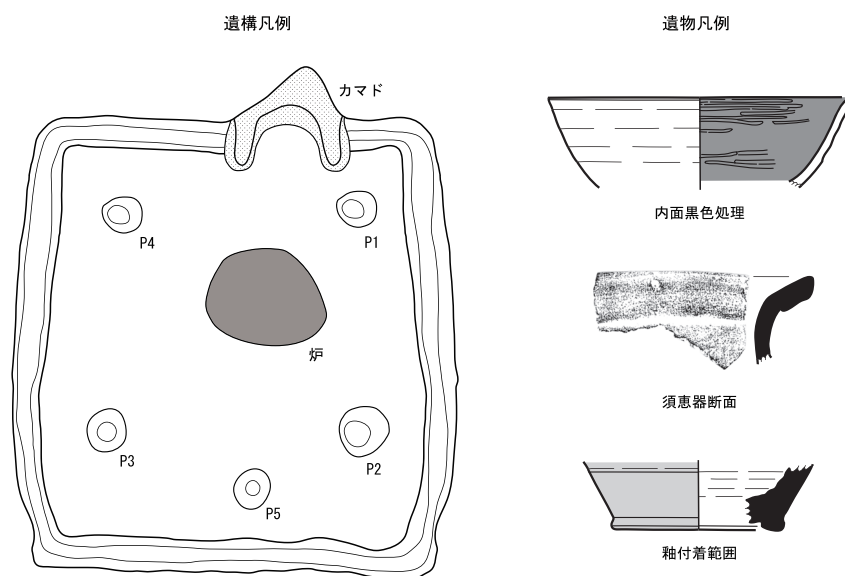
公益財団法人 千葉県教育振興財団

例言

- 1 本書は、千葉市中央区川戸町468-1に所在する川戸・柳沢遺跡のグループホーム建設に伴う発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業は、株式会社カラカマ工務店の委託を受け、千葉市教育委員会生涯学習部文化財課の指導のもと公益財団法人千葉市教育振興財団が実施したものである。
- 3 発掘調査の期間・面積・担当者は下記のとおりである。
期間：2015（平成27）年9月1日～9月30日
面積：144㎡ 担当者：塚原勇人
- 4 整理および本書の製作・編集は、塚原と小林嵩が担当して行った。
- 5 整理期間は、2015（平成27）年10月26日～2016（平成28）年3月11日にかけて、断続的に行った。
- 6 遺構・遺物の撮影は塚原が行った。
- 7 本書の執筆は塚原が執筆した。
- 8 出土資料・調査記録等は千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。
- 9 発掘調査から報告書刊行まで、下記の諸機関の御指導・御協力を賜った。
千葉市教育委員会生涯学習部文化財課 株式会社カラカマ工務店

凡例

- 1 本書に掲載した遺構図等の方位は、公共座標の北を基準としている。
- 2 土層及び遺物の色を記号で示してある場合は、農林水産省監修「新版 標準土色帖」による。
- 3 竪穴住居跡の平面規模は、カマドを通る軸線とこれに直交する軸線との長さを示す。ただし、カマド煙道部の壁への掘り込み部分は含まない。柱穴は4基の支柱穴をカマド右側のものをP1とし、時計回りにP4までとした。カマド対面壁側の出入り口に関連するものをP5とした。
- 4 本文中の挿図の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺構実測図：1/30・1/60
遺物実測図：土器1/4・1/3
- 5 遺構・遺物の図面はAdobe Systems社製Adobe Illustratorで編集作業を行った。
- 6 遺構・遺物写真はデジタルカメラで撮影し、Adobe Systems社製Adobe Photoshopで編集作業を行った。
- 7 第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図より作成したものである。
- 8 遺構配置図・遺構実測図では、竪穴住居跡を下記の通りの略称で表記している。
竪穴住居跡＝住



目次

第1章 川戸・柳沢遺跡の概要	1
1 遺跡の位置及び周辺遺跡	1
2 調査の方法	1
第2章 遺構・遺物	1
1 平安時代	1
2 遺構外出土遺物	6
第3章 まとめ	6
写真図版抄録	

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	2
第2表 出土遺物観察表(1)	7
第3表 出土遺物観察表(2)	8

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 周辺地形図・遺構配置図	2
第3図 第1・4号竪穴住居跡・炉・カマド実測図	3
第4図 第2・3号竪穴住居跡実測図	4
第5図 出土遺物実測図	5

写真図版目次

図版1 調査前現況(南東から)	
第1・4号竪穴住居跡検出状況(北西から)	
第1・4号竪穴住居跡遺物出土状況(南東から)	
第1・4号竪穴住居跡全景(南東から)	
第2・3号竪穴住居跡検出状況(北東から)	
第2・3号竪穴住居跡調査状況(南東から)	
第2・3号竪穴住居跡全景(南東から)	
調査終了状況(南東から)	
図版2 調査区出土遺物	

第1章 川戸・柳沢遺跡の概要

1 遺跡の位置及び周辺遺跡（第1表、第1・2図）

川戸・柳沢遺跡（第1図1）は、支川都川中流域左岸の標高約26mを測る台地上に位置する。支川都川中流域の周辺には国指定史跡の月ノ木貝塚（第1図48）をはじめ、多くの遺跡が確認されている。

本遺跡の周辺には、北側に縄文時代から平安時代にかけての地点貝塚を含む大宮戸遺跡（第1図41）、東側に市立川戸小・中学校を挟んで土師器の包蔵地である山兎遺跡（第1図29）が所在している。

2 調査の方法

調査区が狭小なので、任意に5m単位のグリッドを設定し、遺構平面図作成と遺物の取り上げは、このグリッドを基準として行った。調査の結果、遺構は平安時代の竪穴住居跡4軒を検出した。

第2章 遺構・遺物

1 平安時代（第2・3表、第3～5図）

（1）第1号竪穴住居跡（第2表、第3・5図）

調査区北側から検出した。第4号竪穴住居跡と切り合う。新旧関係は、覆土堆積状況と壁溝の切り合い関係から、第1号竪穴住居跡が新しい。主軸方向はN-57°-Eである。

平面規模は長軸3.56m×短軸3.47mを測り、平面形態は方形を呈する。壁高は0.4m前後を測り、壁は垂直気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、壁溝は北西隅壁付近の一部は消失していたが、カマド下を除いて全周すると考えられ、深さは0.1mを測る。柱穴は出入り口用柱穴1基を検出した。

カマドは東壁のやや南側に設けられ、片袖のみを残す。カマドの規模は、全長1.19m、壁への掘り込み0.41mを測り、燃焼部の掘り込みは、平面規模0.42m×0.33m、深さ0.08mを測る。また、床面の南東側から炉を検出した。炉の平面規模は1.80m×1.49m、深さは0.24mを測る。

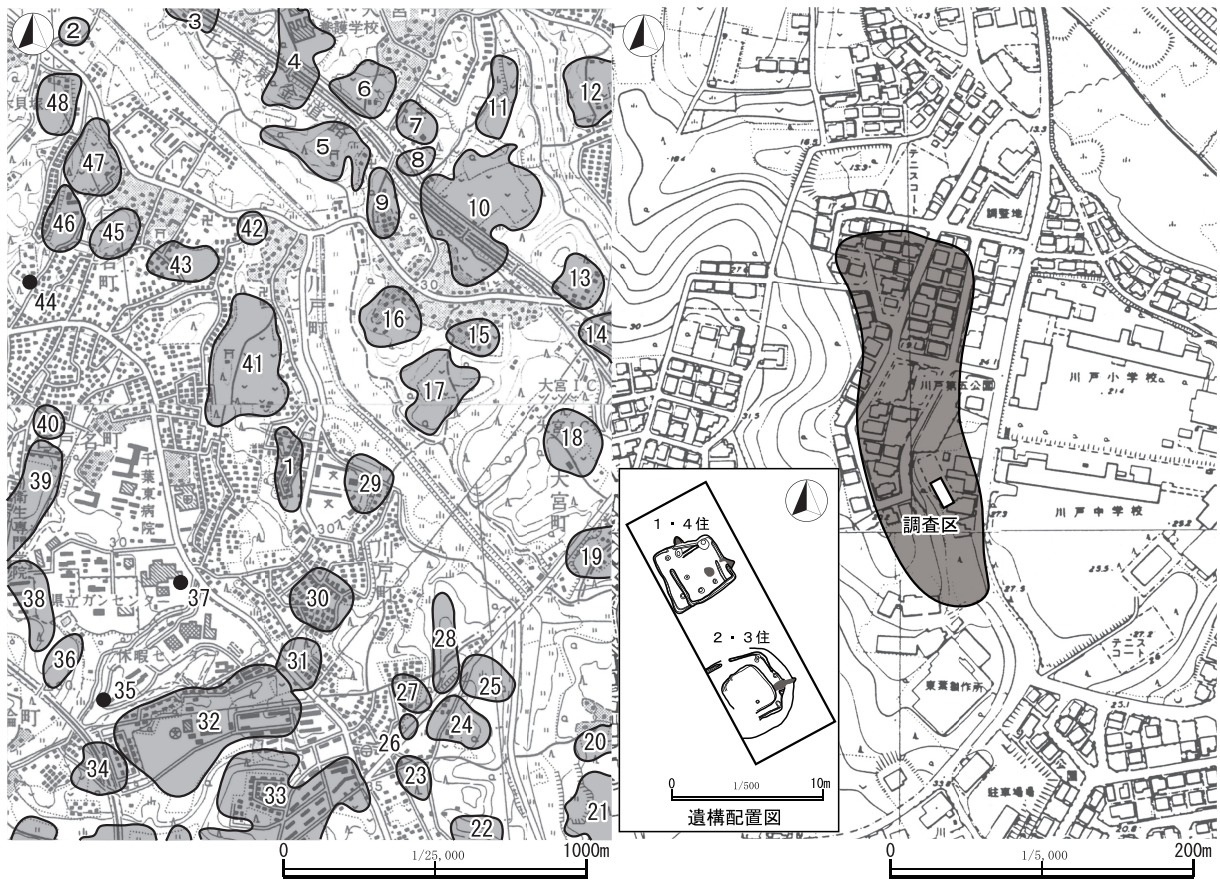
図示可能な遺物は15点である。第5図1～7はロクロ整形の土師器坏である。1・2・4の底部には回転糸切り痕が残る。3の外側下端及び底部の調整は手持ちヘラケズリを施している。土師器坏の底径は、口縁部径に比して小さい傾向にある。8・9は土師器高台付坏であるが、高台は剥離している。10～12は土師器甕、13は須恵器甕、14・15は須恵器甕である。

（2）第2号竪穴住居跡（第3表、第4・5図）

調査区南側から検出した。第3号竪穴住居跡と重複する。新旧関係は、第2号竪穴住居跡の床面の精査中に第3号竪穴住居跡のカマドを検出したことから、第2号竪穴住居跡が新しい。主軸方向は主軸N-69°-Eである。南西側は調査区外のため未調査である。

平面形態は、遺構確認時は円形を呈していたが、調査の結果、北東から南側にかけての壁面が崩落していたことが明らかとなり、本来は方形を呈したと考えられる。平面規模は長軸4.0m以上×短軸4.36mを測る。壁高は0.9m前後を測り、壁の立ち上がりは大きく開く。床面は、第3号竪穴住居跡の埋没後に作り出し、ほぼ平坦である。壁溝はカマド下を除いて全周すると考えられ、深さは0.1mを測る。柱穴は北東隅と南東隅に支柱穴2基、カマド脇から1基検出した。

カマドは東壁のやや南側に設けられていたが、大部分は消失しており、焼土層のみを残す。カマド掘方の規模は、全長1.55m、壁への掘り込み0.65mを測る。

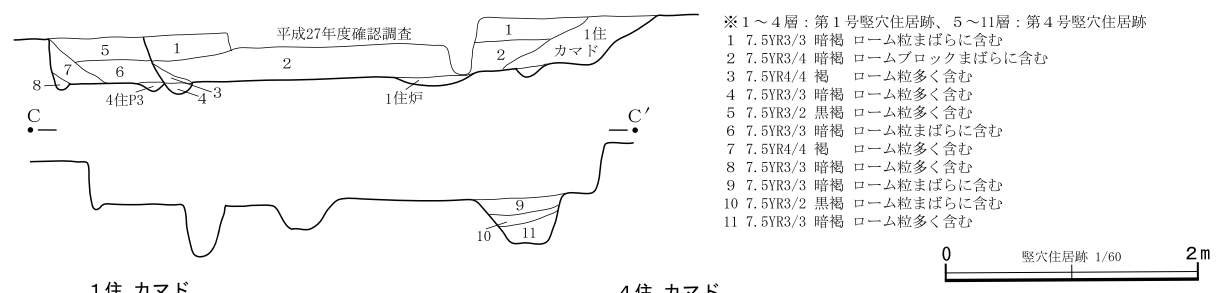
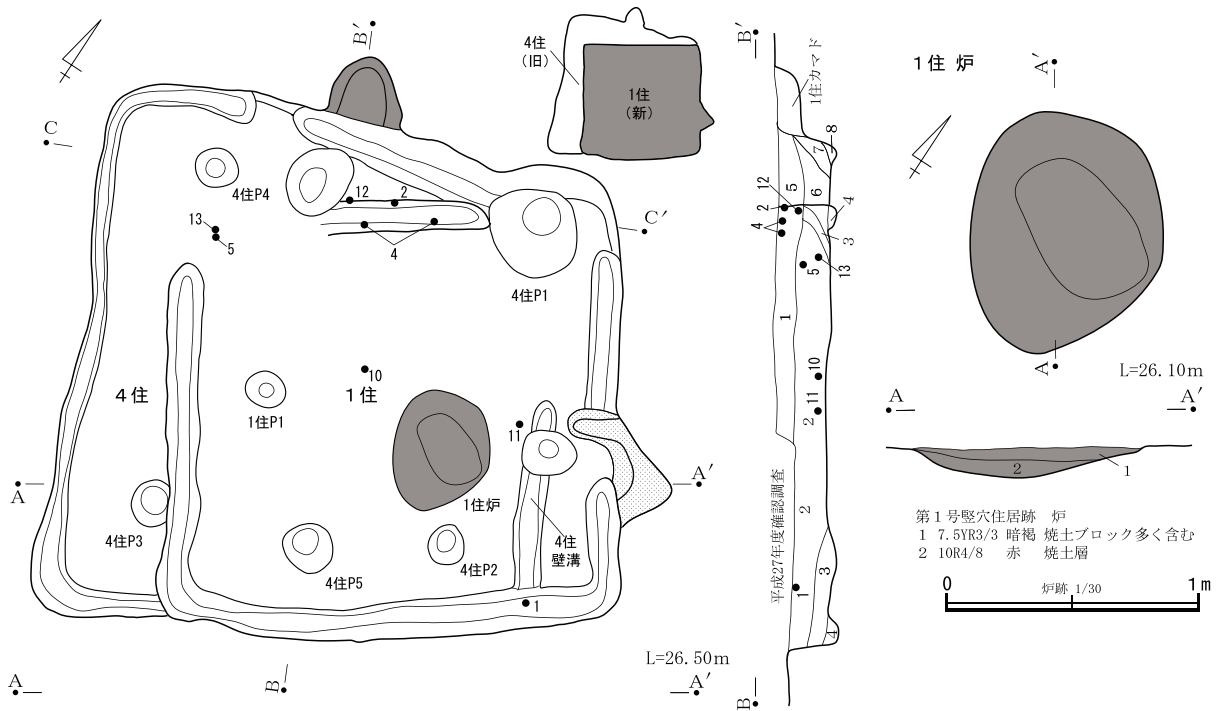


第1図 遺跡位置図

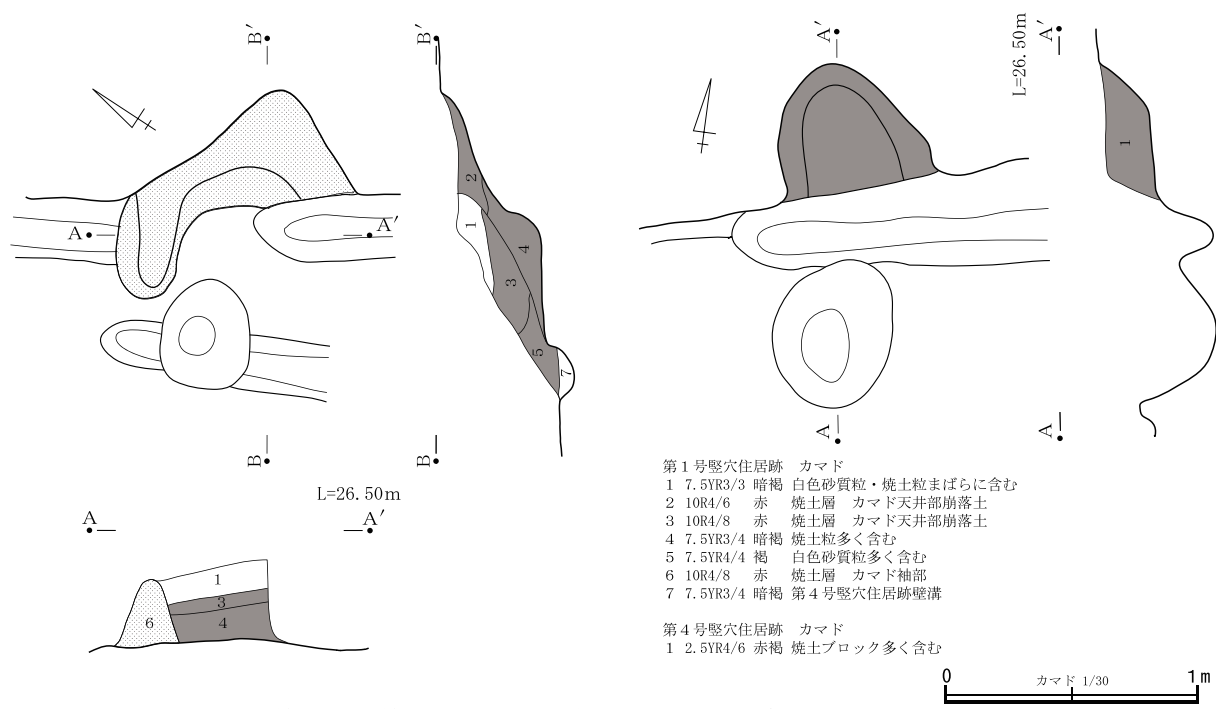
第2図 周辺地形図・遺構配置図

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	川戸・柳沢遺跡	集落跡	縄文(中・後)、平安	25	菱名古墳群	古墳	古墳
2	道免遺跡	貝塚	縄文(早・中・後)	26	菱名台遺跡	包蔵地	旧石器、縄文(中・後)
3	西屋敷遺跡	集落跡、古墳	縄文(中)、古墳(後)、奈良・平安	27	菱名台古墳群	古墳	古墳
4	稲荷台遺跡	集落跡	縄文(中)、弥生、古墳、奈良・平安、中近世	28	川戸・大広遺跡	包蔵地	縄文、古墳
5	近江谷・城山遺跡	城館跡、包蔵地、集落跡	縄文、平安、中世(戦国後期)	29	山鬼遺跡	包蔵地	
6	宿遺跡	包蔵地	縄文(後)、平安	30	ウツギ遺跡	包蔵地、古墳	縄文(中)、古墳(後)
7	栄福寺遺跡	城館跡、古墳、塚、包蔵地	縄文(後)、古墳(前・後)、中近世	31	外ノ谷遺跡	包蔵地	縄文(中)
8	下田南遺跡	包蔵地		32	仁戸名遺跡	集落跡、古墳	縄文(早)・古墳(中・後)、奈良・平安
9	坊屋敷遺跡	包蔵地、集落跡、古墳群	旧石器、縄文(中)、古墳(後)、中世	33	榎作遺跡	包蔵地、集落跡、貝塚	旧石器、縄文(中)、古墳(後)、奈良・平安
10	東五郎遺跡	集落跡、古墳	縄文(中・後)、古墳(中・後)、平安	34	栗山遺跡	包蔵地	
11	東五郎北遺跡	包蔵地	縄文(中・後)、古墳(後)	35	中峠古墳	古墳	古墳
12	三ノ作遺跡	包蔵地	縄文(中・後)	36	池田遺跡	古墳、集落跡、包蔵地	縄文(早・中)、古墳(後)、奈良・平安
13	木戸坊遺跡	包蔵地	古墳(中)	37	庚塚古墳	古墳	古墳
14	清水台遺跡	包蔵地、古墳	縄文(中・後)、古墳	38	瓜作遺跡	集落跡	奈良・平安
15	上人塚遺跡	包蔵地	縄文(後)、奈良・平安	39	庚塚古墳群	古墳	古墳
16	大宮・名木遺跡	包蔵地、古墳	縄文(中・後)、古墳	40	千城園遺跡	包蔵地	
17	大和田遺跡	包蔵地	縄文(前・中・後)、古墳(後)	41	大宮戸遺跡	貝塚	縄文(中)、弥生(後)、古墳(後)、奈良・平安
18	清水台西遺跡	包蔵地		42	郷遺跡	包蔵地	縄文(早・中)、古墳(後)
19	吾妻遺跡	貝塚、古墳	縄文(前・中・後)、古墳	43	郷西遺跡	包蔵地、古墳	縄文、古墳
20	高有遺跡	集落跡	縄文(前～後)、奈良・平安	44	仁戸名・聖人塚古墳	古墳	古墳
21	立堀城跡	城館跡、集落跡	縄文(早～後)、奈良・平安、中世	45	作山古墳群	集落跡、古墳	古墳(後)、中世
22	立堀遺跡	包蔵地、古墳	縄文(後)、古墳	46	へたの台遺跡	古墳、塚、集落跡	古墳(後)、近世
23	菱名台南古墳群	古墳、包蔵地	古墳、奈良・平安	47	へたの台貝塚	貝塚、集落跡	縄文(中)、古墳(中・後)、平安、近世
24	菱名貝塚	貝塚、集落跡	縄文(中)、平安	48	月ノ木貝塚	集落跡、貝塚	縄文(中・後)

第1表 周辺遺跡一覧表

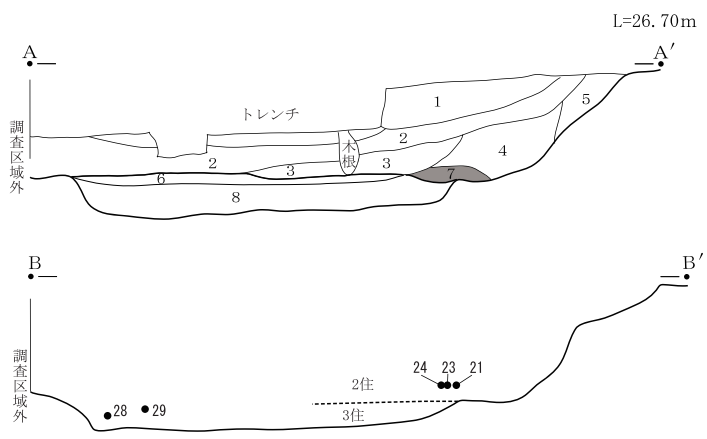
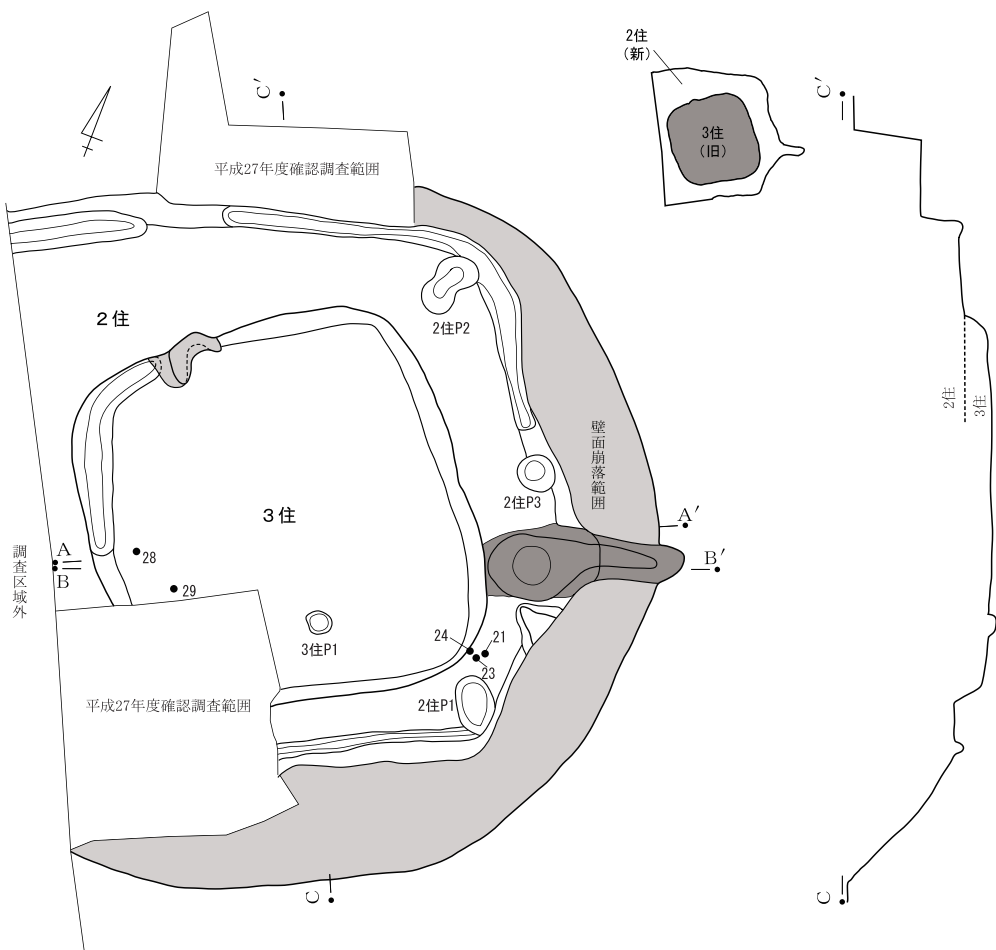


- ※1～4層：第1号竪穴住居跡、5～11層：第4号竪穴住居跡
- 1 7.5YR3/3 暗褐 ローム粒まばらに含む
 - 2 7.5YR3/4 暗褐 ロームブロックまばらに含む
 - 3 7.5YR4/4 褐 ローム粒多く含む
 - 4 7.5YR3/3 暗褐 ローム粒多く含む
 - 5 7.5YR3/2 黒褐 ローム粒多く含む
 - 6 7.5YR3/3 暗褐 ローム粒まばらに含む
 - 7 7.5YR4/4 褐 ローム粒多く含む
 - 8 7.5YR3/3 暗褐 ローム粒多く含む
 - 9 7.5YR3/3 暗褐 ローム粒まばらに含む
 - 10 7.5YR3/2 黒褐 ローム粒まばらに含む
 - 11 7.5YR3/3 暗褐 ローム粒多く含む



- 第1号竪穴住居跡 カマド
- 1 7.5YR3/3 暗褐 白色砂質粒・焼土粒まばらに含む
 - 2 10R4/6 赤 焼土層 カマド天井部崩落土
 - 3 10R4/8 赤 焼土層 カマド天井部崩落土
 - 4 7.5YR3/4 暗褐 焼土粒多く含む
 - 5 7.5YR4/4 褐 白色砂質粒多く含む
 - 6 10R4/8 赤 焼土層 カマド袖部
 - 7 7.5YR3/4 暗褐 第4号竪穴住居跡壁溝
- 第4号竪穴住居跡 カマド
- 1 2.5YR4/6 赤褐 焼土ブロック多く含む

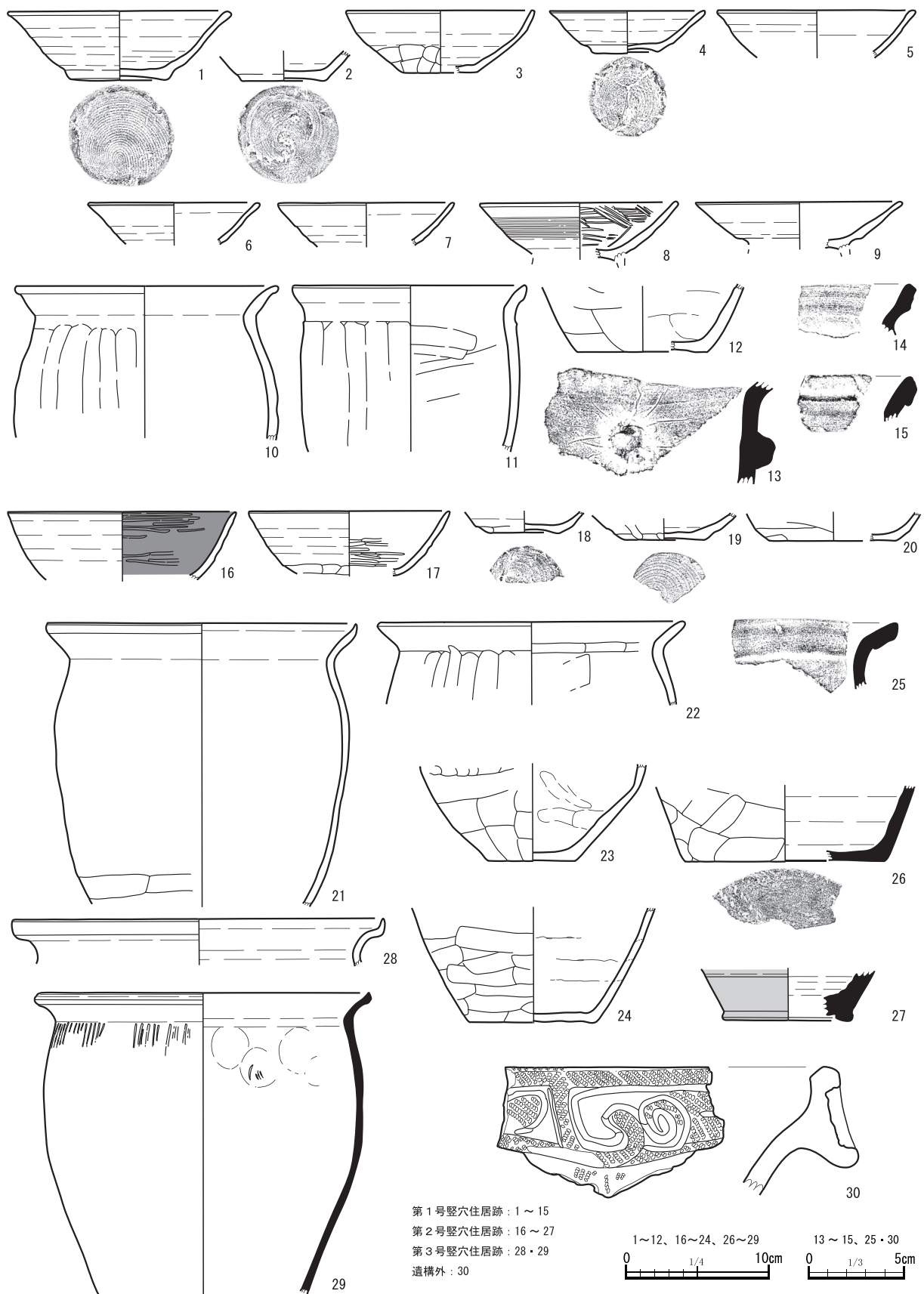
第3図 第1・4号竪穴住居跡・炉・カマド実測図



- ※ 1～7層：第2号竪穴住居跡、8層：第3号竪穴住居跡
- 1 7.5YR3/2 黒褐 ローム粒まばらに含む
 - 2 7.5YR3/3 暗褐 ローム粒多く含む
 - 3 7.5YR4/4 褐 ロームブロックまばらに含む
 - 4 7.5YR4/4 褐 ロームブロック多く含む 壁面崩落土
 - 5 7.5YR4/4 褐 ロームブロック主体 壁面崩落土
 - 6 7.5YR4/4 褐 ロームブロック均質に含む 貼床
 - 7 10R4/8 赤 焼土層 カマド崩落土
 - 8 7.5YR3/3 暗褐 ローム粒まばらに含む



第4図 第2・3号竪穴住居跡実測図



第5图 出土遺物実測図

図示可能な遺物は14点である。第5図16～20はロクロ整形の土師器坏で、16は内面黒色処理を施している。17の外面下端及び底部の調整は手持ちヘラケズリを施している。18・19の底部には回転糸切り痕が残る。21～24は土師器甕、25・26は須恵器甕、27は須恵器壺・瓶類である。

(3) 第3号竪穴住居跡(第3表、第4・5図)

調査区南側から検出した。第2号竪穴住居跡と重複し、第3号竪穴住居跡が古い。主軸方向はN-29°-Wである。平面規模は、長軸3.0m×短軸2.9mを測り、平面形態は隅がやや丸い方形を呈する。壁高は0.25m前後を測り、壁は緩やかに立ち上がる。床面はほぼ平坦で、壁溝は北西隅壁付近から一部検出された。柱穴は出入り口用柱穴1基検出された。カマドは北壁のやや西側に設けられ、片袖のみを残す。カマドの規模は、全長0.4m、壁への掘り込み0.2mを測る。燃焼部の掘り込みは、検出しなかった。

図示可能な遺物は2点である。28は土師器甕、29は須恵器甕である。

(4) 第4号竪穴住居跡(第3図)

調査区北側から検出した。第1号竪穴住居跡と重複し、第4号竪穴住居跡が古い。主軸方向はN-17°-Wである。床中央付近から南東隅にかけて第1号竪穴住居跡に切られているが、平面規模は、南西壁で4.19m、北壁で4.0mを測り、平面形態は方形を呈すると考えられる。壁高は0.25m前後を測り、壁は垂直気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、壁溝はカマド西側付近の一部を除いて全周すると考えられる。柱穴は支柱穴4基、出入り口用柱穴1基検出した。カマドは北壁の中央に設けられていたが、大部分は消失しており、焼土層のみを残す。カマド掘方の規模は、全長1.32m、壁への掘り込み0.51mを測る。燃焼部の掘り込みは、平面規模0.58m×0.48m、深さ0.10mを測る。図示可能な遺物は出土しなかった。

2 遺構外出土遺物(第3表、第5図)

(1) 縄文時代(第3表、第5図)

縄文土器片1点が出土した。第5図30は、深鉢の口縁部の破片で、時期は縄文時代中期後葉である。

第3章 まとめ

今回の調査では、狭小な調査区ながらも合計4軒の竪穴住居跡を検出した。第1・2・3号竪穴住居跡の時期は、出土遺物から9世紀末～10世紀前葉と考えられる。第4号竪穴住居跡では遺物は出土しなかったが、他の竪穴住居跡と同時期の時間幅に収まると考えられる。

川戸・柳沢遺跡の集落の変遷と性格については、調査区の制約上、把握することはできなかったが、当該期の集落跡としては、本遺跡の南西約1～1.5km離れた地点に古墳時代から平安時代にかけての拠点集落跡である仁戸名遺跡(第1図32)、榎作遺跡(第1図33)などが所在する。今後は周辺の遺跡との相互比較・検討が課題である。

参考文献

財団法人 市原市文化財センター 2002 『坊作遺跡―上総国分寺台遺跡調査報告VI―』

遺構 番号	図版 番号	種類 器種	法量		技法・その他	色調等	
			口径			色調	
1住	第5図 1	土師器 坏	口径	(15.6)	1/3残存。内外面共にロクロナデ。底部 回転糸切り。内面に植物の圧痕が残る。	色調	褐
			底径	6.8		胎土	白色粒・石英
			器高	4.8		焼成	良好
	第5図 2	土師器 坏	口径	-	体部～底部1/4残存。内外面共にロクロ ナデ。底部回転糸切り後ナデ。	色調	褐
			底径	6.0		胎土	白色粒・石英
			器高	(2.1)		焼成	良好
	第5図 3	土師器 坏	口径	(13.0)	1/3残存。内外面共にロクロナデ。外面 下端及び底部は手持ちヘラケズリ。	色調	にぶい褐
			底径	(5.0)		胎土	白色粒・石英
			器高	4.3		焼成	良好
	第5図 4	土師器 坏	口径	10.8	3/4残存。内外面共にロクロナデ。底部 は回転糸切後ナデ。	色調	にぶい褐
			底径	4.6		胎土	白色粒・石英
			器高	3.0		焼成	良好
	第5図 5	土師器 坏	口径	(13.8)	口縁～体部片。内外面共にロクロナデ。	色調	にぶい黄褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(3.3)		焼成	良好
第5図 6	土師器 坏	口径	(12.0)	口縁～体部片。内外面共にロクロナデ。	色調	にぶい褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	(2.9)		焼成	良好	
第5図 7	土師器 坏	口径	(12.2)	口縁～体部片。内外面共にロクロナデ。	色調	にぶい橙	
		底径	-		胎土	白色粒微量	
		器高	(3.1)		焼成	良好	
第5図 8	土師器 高台付坏	口径	(13.8)	口縁～底部1/4残存。内面ヘラミガキ。 外面ロクロナデ、刷毛状工具による調整 痕が残る。底部回転ヘラケズリ。高台は 剥がれている。	色調	褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	4.0		焼成	良好	
第5図 9	土師器 高台付坏	口径	14.4	口縁～底部1/5残存。内外面共にロクロ ナデ。高台は剥がれている。	色調	褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	(3.3)		焼成	良好	
第5図 10	土師器 甕	口径	(18.4)	口縁～胴部1/6残存。内面ヘラケズリ後 ナデ。口縁部内外面共にヘラ状工具によ るヨコナデ。外面ヘラケズリ後ナデ。	色調	褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	(10.8)		焼成	良好	
第5図 11	土師器 甕	口径	(16.2)	口縁～胴部1/8残存。内面ヘラナデ。口 縁部内外面共にヘラ状工具によるヨコナ デ。外面ヘラケズリ後ナデ。	色調	褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	(11.6)		焼成	良好	
第5図 12	土師器 甕	口径	-	底部片。内面ヘラナデ。外面及び底部ヘ ラケズリ。	色調	赤褐	
		底径	(9.0)		胎土	白色粒・礫少量	
		器高	(4.9)		焼成	良好	
第5図 13	須恵器 甗	口径	-	胴部片。内面ヘラナデ。外面上部ヨコナ デ、外面ナデ。瘤状の突起が付される。	色調	褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	(5.5)		焼成	良好	
第5図 14	須恵器 甕	口径	-	口縁部片。内外面共にロクロナデ。	色調	灰	
		底径	-		胎土	礫・石英	
		器高	(2.8)		焼成	良好	
第5図 15	須恵器 甕	口径	-	口縁部片。内外面共にナデ。複合口縁。	色調	灰褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	(2.6)		焼成	良好	

第2表 出土遺物観察表(1)

単位はcm、g。()は残存・推定値

遺構 番号	図版 番号	種類 器種	法量		技法・その他	色調等	
			口径	()		胎土	焼成
2住	第5図 16	土師器 坏	口径	(16.0)	口縁～体部1/3残存。内面ヘラミガキ、 外面ロクロナデ。内面黒色処理。	色調	にぶい黄褐
			底径	-		胎土	白色粒・礫
			器高	(4.8)		焼成	良好
	第5図 17	土師器 坏	口径	(14.0)	口縁～体部片。内面ヘラミガキ、外面ロ クロナデ。下端は手持ちヘラケズリ。	色調	にぶい褐
			底径	-		胎土	白色粒・礫
			器高	(4.5)		焼成	良好
	第5図 18	土師器 坏	口径	-	体部～底部片。内面ロクロナデ、外面ロ クロナデ。下端は手持ちヘラケズリ。底 部は回転糸切後、ヘラケズリ。	色調	にぶい黄橙
			底径	(5.0)		胎土	礫
			器高	(1.4)		焼成	良好
	第5図 19	土師器 坏	口径	-	体部～底部片。内面ロクロナデ、外面ロ クロナデ。下端は手持ちヘラケズリ。底 部は回転糸切。	色調	にぶい褐
			底径	(5.4)		胎土	白色粒・石英
			器高	(1.7)		焼成	良好
	第5図 20	土師器 坏	口径	-	体部～底部片。内面ロクロナデ、外面ロ クロナデ。下端及び底部は手持ちヘラケ ズリ。	色調	にぶい黄褐
			底径	(9.0)		胎土	白色粒・石英
			器高	(1.8)		焼成	良好
	第5図 21	土師器 甕	口径	21.6	口縁～胴部1/2残存。内面ヘラナデ及び ナデ。口縁部内外面共にヨコナデ。外面 ナデ、下部はヘラケズリ。外面に炭化物 付着。	色調	灰黄褐
			底径	-		胎土	礫・白色粒・石英
			器高	(19.5)		焼成	良好
第5図 22	土師器 甕	口径	(21.0)	口縁部片。内面ヘラケズリ後ナデ、頸部 ヘラケズリ。口縁部内外面共にヨコナ デ。外面ヘラケズリ。	色調	にぶい褐	
		底径	-		胎土	石英・白色粒	
		器高	(5.8)		焼成	良好	
第5図 23	土師器 甕	口径	-	胴部～底部2/3残存。内面ヘラナデ及び ナデ。外面及び底部ヘラケズリ。	色調	赤褐	
		底径	6.2		胎土	石英・白色粒	
		器高	(6.7)		焼成	良好	
第5図 24	土師器 甕	口径	-	胴部～底部2/3残存。内面ナデ、輪積痕 が残る。外面及び底部ヘラケズリ。	色調	赤褐	
		底径	8.8		胎土	石英・白色粒	
		器高	(8.0)		焼成	良好	
第5図 25	須恵器 甕	口径	(26.0)	口縁部片。内外面共にヨコナデ。複合口 縁。	色調	灰黄	
		底径	-		胎土	白色粒・礫	
		器高	3.2		焼成	良好	
第5図 26	須恵器 甕	口径	-	底部1/4残存。内面ロクロナデ。外面ヘ ラケズリ。底部ナデ。底部に縄目が残 る。	色調	灰黄	
		底径	(14.0)		胎土	白色粒・礫	
		器高	(5.2)		焼成	良好	
第5図 27	須恵器 壺・瓶類	口径	-	底部片。内面ロクロナデ。外面ロクロナ デ、下端は回転ヘラケズリ。高台部ロク ロナデ。高台部は貼り付け。内面一部、 外面全体に釉が付着する。	色調	灰黄	
		底径	(9.0)		胎土	白色粒	
		器高	(3.5)		焼成	良好	
3住	第5図 28	土師器 甕	口径	(26.0)	口縁部片。内外面共にヨコナデ。	色調	赤褐
			底径	-		胎土	石英・白色粒
			器高	(3.1)		焼成	良好
第5図 29	須恵器 甕	口径	(23.0)	口縁～胴部1/3残存。内面ナデ、一部に 青海波が残る。口縁部内外面共にヨコナ デ、下端は回転ヘラケズリ。外面ナデ、 一部に平行タタキが残る。	色調	にぶい褐	
		底径	-		胎土	石英・白色粒	
		器高	(20.8)		焼成	良好	
遺構外	第5図 30	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内面ヘラケズリ後ナデ。外面原体単節LR・RLを施 文の後、棒状工具による沈線で文様を描出。下半はヘラケズ リ、原体単節LR・RLが一部に確認される。時期は縄文時代中 期後葉。	色調	にぶい褐
			底径	-		胎土	雲母多量
			器高	(6.8)		焼成	良好

第3表 出土遺物観察表(2)

単位はcm、g。()は残存・推定値



調査前状況（南東から）



第1・4号竪穴住居跡検出状況（北西から）



第1・4号竪穴住居跡遺物出土状況（南東から）



第1・4号竪穴住居跡全景（南東から）



第2・3号竪穴住居跡検出状況（北東から）



第2・3号竪穴住居跡調査状況（南東から）

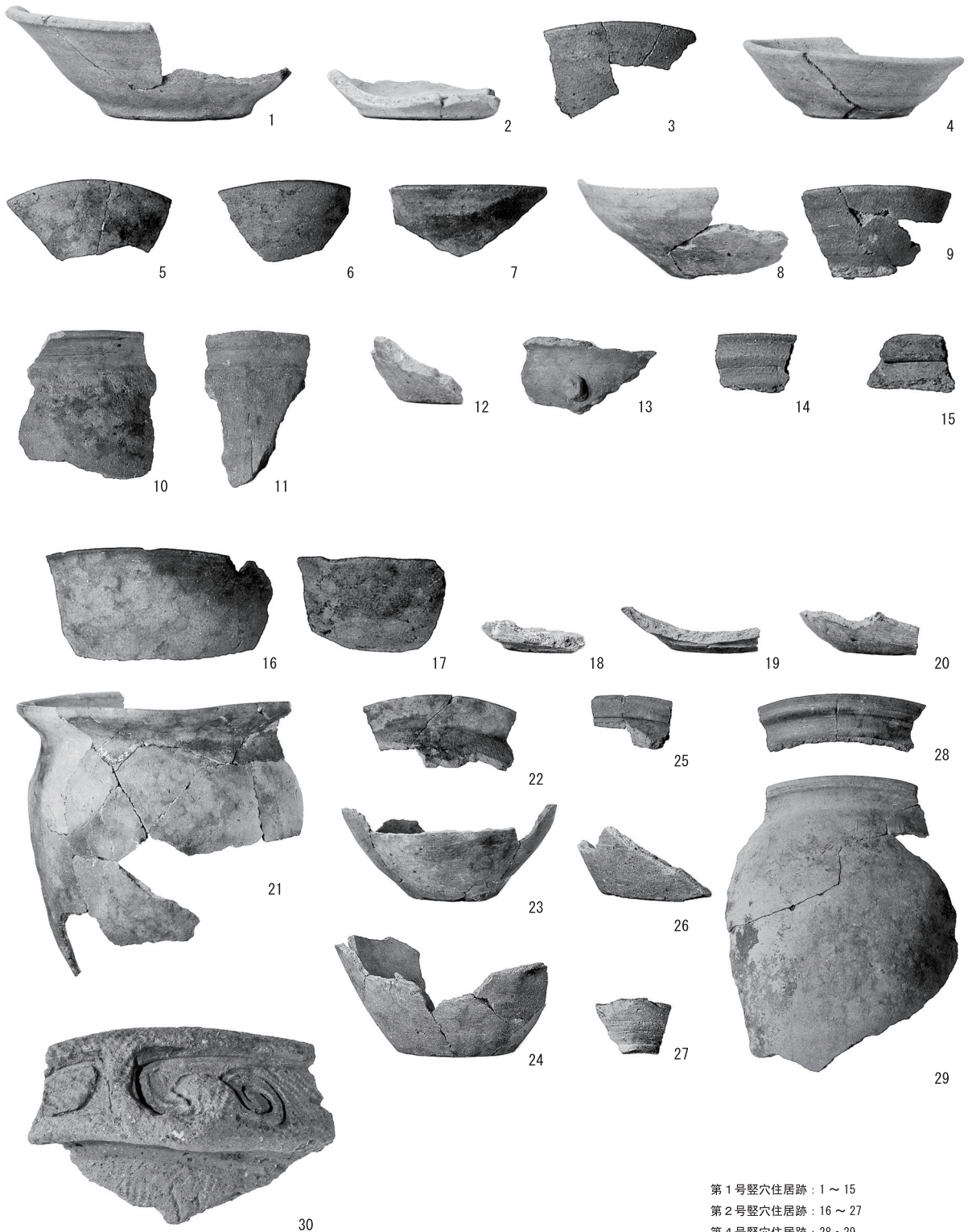


第2・3号竪穴住居跡全景（南東から）



調査終了状況（南東から）

写真図版 2



第1号竪穴住居跡：1～15
第2号竪穴住居跡：16～27
第4号竪穴住居跡：28・29
遺構外：30

調査区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちばしかわど・やなぎさいせき					
書名	千葉市川戸・柳沢遺跡					
副書名	グループホーム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書					
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	塚原 勇人・小林 嵩					
編集機関	公益財団法人 千葉市教育振興財団 事務局 埋蔵文化財調査担当					
所在地	〒260-0814 千葉市中央区南生実町1210 埋蔵文化財調査センター TEL : 043-266-5433					
発行年月日	2016年3月11日					
ふりがな	ふりがな	コード	経緯度	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号				
かわど やなぎさいせき 川戸・柳沢遺跡	ちゅうおうく 中央区 かわどちよう 川戸町 468-1	121011 中央区 96	北緯 35° 35' 2" 東経 140° 10' 1"	20150901 ~ 20150930	144 m ²	グループホーム
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
川戸・柳沢遺跡	集落	平安時代	竪穴住居跡 4軒	土師器・須恵器		
要約	今回の調査では、合計4軒の竪穴住居跡を検出した。竪穴住居跡の時期は、出土遺物から9世紀末～10世紀前葉と考えられる。					

千葉市川戸・柳沢遺跡
ーグループホーム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書ー
平成28年3月11日発行

編集・発行 株式会社 カラカマ工務店
公益財団法人 千葉市教育振興財団
事務局 埋蔵文化財調査担当
〒260-0814

千葉市中央区南生実町1210

T E L : 043-266-5433

印 刷 株式会社 京文社印刷

〒260-0021

千葉市中央区新宿1-25-22

T E L 043-242-0064

